The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	子ども兵士を描く児童文学 ： 『子ども兵士の帰郷』が喚起する議論
Author(s)	村田, はるせ
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2025, 36, p. 25-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100833
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』36 号（2025）pp.25-43

子ども兵士を描く児童文学

―『子ども兵士の帰郷』が喚起する議論 ―

Children's Literature depicting a child soldier:
Reader's Arguments provoked by *Le retour de l'enfant soldat*

村田 はるせ*
MURATA Haruse

0．はじめに

この稿で取り上げるのは、子ども兵士を描いたジュニア小説である。1990 年代、サハラ以南アフリカでは多くの民間人が被害者・加害者として巻き込まれる紛争が頻発し、子ども兵士にも注目が集まった[1)]。こうしたなかフランス語で書くサブサハラアフリカ出身（以下ではアフリカ出身とする）作家たちが子ども兵士を小説の主題とした。たとえばコートジヴォワールのアマドゥ・クルマ(Ahmadou Kourouma)はリベリアとシエラレオネの内戦を舞台にして『アラーの神にもいわれはない(*Allah n'est pas obligé*)』（2000 年）を、コンゴ共和国のエマニュエル・ドンガラ(Emmanuel Dongala)は自国の内戦を舞台に『狂犬ジョニー(*Johnny chien méchant*)』（2002 年）を発表した[2)]。

子ども兵士は、フランス語のアフリカ児童文学のうちジュニア小説の主題ともなってきた[3)]。本稿で注目するのはそうした作品の一つで、コートジヴォワールの作家フランソワ・ダシーズ・ンダ(François d'Assise N'Dah)が書いた『子ども兵士の帰郷(*Le retour de l'enfant soldat*)』（2008 年）である。

---

* アフリカ学会会員(Japan Association for African Studies)

1) サハラ以南アフリカでの 1990 年代の紛争については、武内（2017)、戸田（2008）などを参照。

2) 『アラーの神にもいわれはない』は邦訳（真島 2003）があり、元木(2004)の評論がある。『狂犬ジョニー』については、拙稿（村田 2017）で紹介・考察した。

3) ここでいうフランス語のアフリカ児童文学は、アフリカに出自がある作家や挿絵画家が手がけ、アフリカのフランス語公用語圏諸国やフランスで出版した作品を指している。そうした作品には日本での絵本（フランス語では album）やジュニア小説（同 roman jeunesse）にあたる作品がある。ジュニア小説の定義はないが、絵本に比べるとページ数・文字数が多い。西アフリカのフランス語公用語圏諸国の出版社のカタログには、ジュニア小説はおおむね十代初めの子どもを対象とした作品として掲載されている。

『子ども兵士の帰郷』は内戦後の国を舞台とし、元子ども兵士ザンゴの出身地での彼の受け入れをめぐる意見対立を描く。作品はこうして、元子ども兵士と出身地域との和解、大人たちの責任について、異なる立場から語り、作品を読んだとくに若者の議論を喚起しようとする。本稿の目的は、この作品の複数の意見対立がどのようなものとして書かれているかを考察し、内戦後の社会再生の展望を読み取ることである。

以下ではまず 1 章で著者のンダの経歴とンダの本作執筆の意図を紹介する。次に 2 章では子ども兵士の定義を説明する。つづいて 3 章で『子ども兵士の帰郷』の物語を示したあと、4 章で子ども兵士を扱った他のジュニア小説と比較した『子ども兵士の帰郷』の特徴を述べる。5 章ではいよいよ本作の考察に入り、元子ども兵士ザンゴについての意見対立を分析する。作品に書かれる対立は深刻である。村には、ザンゴは紛争の犠牲者だと考える少数の住民がいるが、大多数の村人は作品の最後までザンゴを村に受け入れることを拒否するのである。だが意見対立からは排除されている、紛争中の暴力の犠牲となった女性たちの意見や行動を丁寧に読むと、物語は、子どもの犠牲を繰り返さない社会再生のあり方を提示していると解釈できるのである。最後に 6 章では全体をまとめて稿を閉じたい。

１．著者フランソワ・ダシーズ・ンダ

フランソワ・ダシーズ・ンダ[4]は 1968 年 10 月 3 日に、コートジヴォワール中央部のチェビス(Tiébissou)で生まれた。彼の執筆活動は、後期中等教育課程のフランス語教師としての勤務の傍ら続けられてきた。

ンダ自身のブログ[5]やフランス国立図書館のサイトによると、ンダは 2001 年以降に少なくとも 23 作の文学作品を発表してきた。このうち数作はコートジヴォワールとフランスの出版社の共同出版で、その他はコートジヴォワールで出版されている。

ンダのおもな作品は恋愛小説・短編である。そのなかには『恋の傷あと(*Cicatrice d'amour*)』(2009 年) など、コートジヴォワールの出版社 NEI /CEDA の「アドラ・シリーズ(collection Adoras)」に収められている小説数作もある。同シリーズは、若く美しく、経済的に自立した女性の情熱的な恋愛を描き、フランス語で読む西アフリカの女性に人気

---

[4] ンダの経歴は Etty(2012)のインタビューやフランス国立図書館(BNF)の図書カタログ上の情報を参照した。

[5] ンダは 2007-2012 年に、« Les confidences de François d'Assise NDA »（フランソワ・ダシーズ・ンダの打ち明け話）というブログに自身の短編や、文学に関する意見などを掲載していた。http://ndahfranc.centerblog.net/（2024 年 9 月 12 日確認）

があるという(Nadale 2023)。

また筆者は未読だが、短編集『抵当に入れられた運命(*Destins hypothéqués*)』(2019 年)は、女生徒の妊娠を主題とした社会啓発的な作品とみられる。これらの作品からは、職業柄十代の若者に接してきたンダが、若い世代の感性や関心に沿う作品を執筆してきたことがうかがえるのである。

本稿で取り上げる『子ども兵士の帰郷』は、ンダの 6 作のジュニア小説のうち、3 作目の作品である。ンダは 2012 年のインタビューでは、同作がコートジヴォワールの文学賞「イヴォワール賞(Prix ivoire)」にノミネートされたとしている(Etty 2012)。また本作はコートジヴォワールの前期中等教育第二学年の教科書として採用されているとも語っている(Etty 2012)。筆者は 2019 年にコートジヴォワールの出版社クラシック・イヴォワリアン(Classiques ivoiriens)の社長ドラマン・ボワレ(Dramane Boiré)氏にインタビューした際、その時点でも同作が教科書として採用されているのを確認している。

本作がコートジヴォワールの教科書となっている背景には、同国の 2002-2011 年の政治危機があることはまちがいないだろう[6)]。同国では 1990 年代半ば以降、政治家間の政権争いによって国民の分断が進んでいたところ、2002 年 9 月には当時の L・バボ政権に反対する武装集団が蜂起して国土の北半分を占拠した。そのご国土が統一されるのは、2010 年の大統領選挙の結果をめぐって起きた「選挙後の危機」と呼ばれる武力衝突が終息した 2011 年のことであった。この時期、政府軍と多様な反政府武装集団の戦闘において、また反政府武装集団による殺害・誘拐などの暴虐行為と、それを逃れるための避難において、子どもの生活と生命に深刻な被害がもたらされていた。アムネスティ・インターナショナルは 2002 年 12 月の報告書で、ほぼ 14 歳の子ども数百人が反政府武装集団に徴兵されたとみられると報告している(Amnesty International 2002:5)。また 2006 年 10 月には国連事務総長が、とくに少女たちがレイプを含む性暴力の被害を受けていること、子どもが殺害や身体切断の被害を受けていること、児童労働・人身売買の対象となっていることなどに加え、反政府武装集団と政府支持の民兵団双方によって約 4000 人の子どもが徴兵されていたことを報告している(UN, Conseil de Sécurité 2006)。

本作はこうした状況下で書かれ、発表された。ンダはブログで本作を紹介し、こう書いている。

---

6) この紛争の詳細は、佐藤(2015)を参照。

> 今日、コートジヴォワール人全員がみずからを犠牲者だと主張しているのは遺憾である。加害者なしの被害者などいるだろうか。（…）この小説の中心に子ども兵士を据えることで、われわれが人間の愚かさの限界線を幾度も後退させたと示したかった。青少年を使って政争や社会矛盾を解決するとは、忌むべき犯罪だ。青少年をわれわれの加害者として非難するとは、いっそう悍ましい犯罪である（N'Dah ブログ 2008）。

ここには、子どもを犠牲にして責任をとらない大人たち、とくに政治エリートへの最大級の非難が表明されている。だがこれはたんなる告発の物語ではない。ンダ自身、「国民和解の問題を、その実行を促す表現で提示する」（N'Dah 2008 ブログ）と書いているように、これは、人間としての一線を越えてしまった者は再び社会で生きていけるのか、和解の方法はあるのかと、紛争後の社会を再建することになる若い読者の想像力に訴えかけ、考えてもらおうとする作品なのである。

２．子ども兵士とは

では「子ども兵士」の定義とはどのようなものであろうか。1989 年採択の国連子どもの権利条約は第 38 条で、締約国は「15 歳未満の者が敵対行為に直接参加」しないよう、そして「15 歳未満の者を自国の軍隊に採用することを差し控える」よう義務付けている [7]。しかしこの条項は、同条約が子どもを 18 歳以下のすべての者と定めていることに矛盾する。また子どもは多様な武装集団にも徴兵される可能性があるし、兵士以外の危険な活動にも従事させられる。そのため子ども兵士の定義は、「国連加盟国、国連事務総長、国際 NGO、元「子ども兵士」などの動きによって」、「選択議定書などの国際条約やその他の法的拘束力をもたない宣言などによって、さらに発展」（勝間 2011:124）させる努力がなされてきた。

現在では子ども兵士は、2007 年にユニセフが国際会議で決議した「軍隊または武装集団に関わる子どもに関するパリ原則および指針［通称パリ原則］」に従い、以下のように定義され、保護の対象となっている。すなわち子ども兵士は 18 歳未満であり、性別にかかわりなく直接戦闘に参加させられている子ども、偵察、スパイ、歩哨、武器密輸、物資輸送、雑役などの仕事をさせられたり、性奴隷にされたりしている子どもである。また子どもが強制的に徴兵されたか、みずから志願したかは問われない。そして所属が政府の軍隊であ

---

[7] 条約の訳は、児童の権利条約（児童の権利に関する条約）（政府訳）より。
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jido/index.html（2024 年 8 月 6 日確認）

るか非政府の武装集団であるかも問われない(UNICEF 2007:7-8)。

『子ども兵士の帰郷』に引きつけるなら、主人公ザンゴは、反政府武装集団に強制加入させられ、直接戦闘に参加していた子ども兵士である。

３.『子ども兵士の帰郷』の物語

それでは『子ども兵士の帰郷』の物語を以下に示したい。

舞台は、数年間続いた内戦が終結したばかりのアフリカの架空の国である。物語は 16 歳の少年ザンゴが故郷のスカサ村に帰る場面から始まる。ザンゴは 3 年前に村を襲った反乱軍に誘拐され、過酷な訓練を経て兵士となった。そのごは命じられるまま村々の襲撃を繰り返していたザンゴは、やがて仲間と故郷スカサ村も襲った。この際ザンゴは、いとこアジョ・ンゴをレイプし、村人の面前で村長を打擲したのだった。

このためザンゴが帰郷すると、村の多くの住民は激しい憎悪を向ける。父さえも、家族にザンゴとの接触を禁じるのだった。村の若者たちも、ザンゴを処刑しようと襲いかかってくる。こうしたなか村長や村の名士といった村の指導層は、伝統裁判によってザンゴへの処罰を決定しようとする。

いっぽう村でザンゴを擁護したのは、ザンゴの母親、村長の相談役、学校の教師、村長の娘のアヤブレなど少数の住民だけであった。

伝統裁判の審判を待つあいだ、ザンゴは政府の政策により、小学校に復学する。身体的には成熟した反面、勉強の遅れを取り戻すのに苦労するザンゴを、小学生たちは見下す。しかしテレビで放送される映画の影響で戦争に興味をもっていたゼプレだけは、ザンゴに密かに憧れ、英雄のような体験を語ってほしいとせがむのだった。幼いゼプレには内戦の記憶がなかった。しかしザンゴの壮絶な体験に衝撃を受けたゼプレは、ザンゴこそが戦争の犠牲者だと気づき、ザンゴの一番の味方になろうと心に誓うのだった。

ザンゴはこうしたなか、村人の農作業を手伝ったり、村の共同倉庫の作物を窃盗犯から守ったりして村のために働く。しかし村人たちの態度は変わらず、とうとうザンゴは伝統裁判に乗り込み、自分は戦争の被害者でもあると弁明を試みるのだった。すると村長は怒りを爆発させてザンゴを銃で撃ち、重傷を負わせる。村長はすぐに逮捕され、起訴されたのだった。

村長の裁判の日、検事は、戦争中の犯罪を裁くのは国家であると、村長への有罪を求刑した。同時に検事は、傍聴に集まった村人に向かって、戦争に加担させられた子どもの行動に責任があるのは、子どもを徴兵した大人たちであると説明し、ザンゴを迎え入れるよ

う村人に訴えるのだった。

裁判は、村長に執行猶予付きの有罪判決を下して結審する。判決や検事の言葉が村人を納得させた様子はなく、ザンゴは、村にとどまるにはこれからも長い闘いが続くと覚悟するのだった。それでもザンゴは後日、通学路で、多くの小学生たちがザンゴに心を開いてくれたと知る。それはゼプレの働きかけのおかげであった。

４．他のジュニア小説との比較：『子ども兵士の帰郷』の特徴

では以上のような『子ども兵士の帰郷』の物語には、どのような特徴があるのだろうか。Quiñones(2012)、Attikpoé(2008)、Minga(2012)は、フランス語表現のアフリカ出身作家が、紛争に巻き込まれた子どもを描いた児童文学作品を多数紹介している。このうち子ども兵士を主題とし、2012 年までにアフリカまたはフランスで発表されたジュニア小説は 4 作である。4 作中で筆者が入手できたのは、ベナンの F・クアオ＝ゾッティ(Florent Couao-Zotti)の『戦火のシャルリ(*Charly en guerre*)』（2001 年）（2002 年に文化技術協力機関(ACCT)児童文学賞受賞)、コンゴ民主共和国の P・ブツィンディ(Patrick-Serge Boutsindi)の『子ども兵士(*L'enfant soldat*)』（2001 年）と、『子ども兵士の帰郷』である。

『戦火のシャルリ』の舞台は内戦中のリベリアあるいはシエラレオネと思われる国で、9 歳の主人公シャルリは武装集団に捕らえられる。しかし誘拐された母の行方を追っていたシャルリは、子ども兵士になることを拒み、年長の子ども兵士ジョンとともに逃亡する。物語では、両親を亡くし、生きるために子ども兵士となったジョンの体験が詳らかにされるのである。

いっぽう『子ども兵士』では、主人公の少年マクトゥが民兵団の説得に応じて自発的に兵士となり、内戦中の残虐行為に手を染める。内戦終結後、マクトゥは首都を放浪し、都会での生活に疲れ果てると、出身村に戻り、父を継いで狩人になる。

上記２作品のおもな舞台は内戦中の国である。『子ども兵士』には終戦後の社会も描かれるが、マクトゥはすんなりと故郷の暮らしを再開している。彼は、「村で民兵に徴兵されてから帰郷するまでのどんな小さな記憶も消したい」(Boutsindi2001 :73)とするが、その記憶を消すことにも困難はないようである。彼が何事もなかったかのように新しい人生に臨む展開は、子ども兵士の物語としては不自然であるとも指摘されている(Attikpoé2008 :194)。

こられのジュニア小説に対して、『子ども兵士の帰郷』は、内戦後の元子ども兵士の帰郷の困難を描く物語である。子ども兵士の研究によると、元子ども兵はしばしば「自分の家

族や地域社会に対する残虐行為を強制され」ているため、「生まれ育った町や村の人びとから、償いようがない罪を犯したとみなされ」、「家族や地域社会の人たちは、子どもたちを許すべきだと言われてもなかなか納得できない」（シンガー2006:166）のだという。ちなみに上述したクルマやドンガラの小説も、この点は描いていない。『子ども兵士の帰郷』の特徴は、この困難に向き合い、子ども兵士をどのように社会に受け入れるべきかについて、多様な意見対立を描く物語なのである。

５．『子ども兵士の帰郷』が喚起する議論

それでは以下で『子ども兵士の帰郷』を考察していきたい。本作を貫くのは、ザンゴを拒否する人々、受け入れようとする人々の間にある深い溝である。それは大人同士の対立、ザンゴと同世代の若者同士の対立、司法と村の伝統の対立を通して描かれ、ザンゴは最後まで村に完全に受け入れられることはない。これらの対立はどう描かれ、読者に訴えかけるのだろうか。

５．１　大人同士の対立

大人同士の対立において、ザンゴを拒否する大人の代表は村長である。物語の序盤、相談役ジョマンによってザンゴの帰村を知らされた村長の反応は、「やつを処刑するのか、あるいはさっさと追い出したらいいのか、すぐさま言ってください」（N’Dah2008:28）というものである。ジョマンが、ザンゴは意に反して兵士となり、つらい体験をした「犠牲者」（N’Dah 2008:28）だと語りかけても、村長は激怒するばかりである。

ザンゴの父ゴザンゴも息子を激しく憎んでいる。ザンゴは武装集団に母メヂダを殺すと脅され、意に反して武装集団に加入したのだった。しかしメヂダのそうした説明をゴザンゴはけっして信じなかったのである。彼は、メヂダがザンゴにこっそり食事を与えているのを知ると、メヂダを殴り、食事に排尿してザンゴを辱めるのだった。

村の大多数の大人も村長に同調し、ザンゴに日常的に「報復的な振る舞い」（N’Dah2008:71）をする。ザンゴが村長に撃たれた際にも、彼らの反応は、「とうぜんの報いを受けただけだ！」（N’Dah 2008:82）というものであった。

ザンゴへの村人の憎しみの深さは、ザンゴにレイプされて妊娠したアジョ・ンゴの父親ケフォの振る舞いが雄弁に語る。裁判で検事が村長の有罪を主張したとき、ケフォは逆上し、「わしも有罪にしてくれ、間に合ううちにそうしてくれ。こんどはわしがやつを、あの犯罪者を殺してやる、ぜったいにそうしてやる」（N’Dah 2008:89）と、ザンゴへの報復心を

あからさまにしたのだった。

これに対してザンゴの帰郷に賛成する大人はごくわずかである。ジョマンは、ザンゴには「新たなチャンスを与えるべき」（N’Dah 2008:29）という小学校教師のボニ先生の意見に同意し、村長への執り成しを引き受ける。しかし村長の頑なな拒否にあい、このようにボニ先生に語る。

> ほんとうは、われら全員に罪があるのです。このかわいそうな子どもたち、われらの子どもたちの現在の試練を招いたのは、われら大人の身勝手なのです。（…）そしていまになって被告席に座らされているのは、この子たちなのです。（N’Dah 2008:29）

ジョマンはここで自分を含めた大人を指す代名詞「われら」を繰り返し、大人たちには、この国で起きたこと、とりわけ子どもの徴兵に責任があるとしている。

以上のような大人間の対立が浮き彫りにするのは、戦後の社会再生に関する視野の違いである。ジョマンはザンゴを拒否する村長の態度に、「われらに赦免ということができないなら、とりわけ一人の子どもを赦せないなら、われらが願っている国民和解がどうやって実現するでしょう」（N’Dah 2008:29）とも語っている。ここからは、戦闘が終結するだけでなく、国民が互いを赦しあわなければ、真に平和が訪れたことにはならないという考えがうかがえる。ジョマンの視野は国全体に及び、ザンゴへの赦しはスカサ村を含む社会全体の再生の一環なのである。

これに対し、ザンゴを拒否する村人たちの視野は、村内の人間関係や村が蒙った被害の外に及ぶことはない。村人たちは、村の「神」（N’Dah 2009:78）や、神と強く結びついた「伝統」（N’Dah 2008:96）を後ろ盾にした権威をまとう村長や村の名士ら上層部が示す、村長を善、ザンゴを悪とする見方に従うばかりである。反乱軍にたびたび襲われ、心身ともに傷を負った村人にとっては、ザンゴは排除したい存在となっている。

とはいえ村長の言動には、ザンゴによって凋落させられた威信の回復に対する執着もうかがえる。たとえば村長は、ザンゴを銃撃する直前、「この血にまみれたやつが、村長であるわしに歯向かうとは！」（N’Dah 2008:77）と、みずからの不可侵性をあえて村人に意識させているのである。

村長や村人のこうした姿が示すこと、それは村長が権威によって村をまとめ、村人の日々の営みを支えてきた、内戦前の秩序の回復への希求ではないだろうか。ザンゴの排除はそのために不可欠なのである。子どもたちの誘拐を許した責任を感じることや、村の新たな

あり方を模索することは、彼らの関心の外にあるのである。対立する大人世代の意見は、読者にこのように示されているのである。

５.２　若者同士の対立

ではザンゴと同年代の若者たちの対立はどのようなものだろうか。ザンゴ排斥の意見をリードするのは、村の若者を率いるザコビである。ザンゴの帰郷を知ると、ザコビはすぐに、「おれたちの姉妹と母親をレイプし、おれたちの兄弟と親たちを殺し、おれたちの富を略奪し、おれたちの神聖な場所を冒涜したうえで、やつはおれたちを嘲るために戻ってきた」（N’Dah 2008:31）と若者たちをけしかけ、ザンゴを集団で殺してしまおうとする。ザコビの発言中では、若者集団を指す「おれたち」とザンゴは明白に対立関係に置かれている。ザコビのこの呼びかけに、若者たちは興奮して応じたのだった。

物語のこの場面では、駆けつけたアジョ・ンゴの批判と、村長の娘アヤブレの必死の説得によりザンゴは救い出される。しかし後日、アヤブレと一緒にいたザンゴの前に現れた若者の一人ガストンは、「おれがおまえだったら自殺しているさ。罪もない人間を殺すより、そのほうがましだ。そうさザンゴ、身内を殺すより、自分を拉致したやつらに残忍に殺されるほうがましさ！」（N’Dah 2008:51）と、ザンゴを罵り、若者たちがザンゴをどのように見ているかを明かす。ガストンたち若者にしてみれば、ザンゴが反乱軍から逃亡せず、残虐行為を続けたことは、望んで兵士になった証拠であった。彼らは、反乱軍に強制加入させられたというザンゴの主張を偽りとみなし、処刑してもよいとみなしていたのである。

だが読者は、このあと作中でザンゴが小学生のゼプレに語る体験談から、子どもたちは兵士になるとき判断力や抵抗力を奪われていたと知ることになる。スカサ村の子どもたちを捕らえた反乱軍兵士は、銃で子どもたちを脅して無抵抗にすると、「不死身になれる」（N’Dah 2008:64）という謎の液体を飲ませたのだった。ザンゴの推測では、このとき飲まされたのは、残虐行為に臨ませるため、感覚を麻痺させる物質である。子どもたちはこうして最初の訓練を受け、縛り上げられた捕虜を銃殺したのだった。同時に子どもたちの多くも、銃の暴発によって腕や指を失ったのだった。

兵士になったザンゴは、麻痺した感覚のままスカサを含む村々を襲撃し、「拷問、レイプ、殺害、略奪」という一連の手順で「勝利」（N’Dah 2008 :68）を重ねた。ザンゴは、「頭蓋骨とか、男の性器とか、手とか」を「戦利品」（N’Dah 2008 :68）とし、「グリグリ」（N’Dah 2008 :68）と呼ばれる護符によって銃弾から身を守れると信じていた当時の異様な精神状態をも告白している。そんなザンゴの兵士生活は、政府軍の待ち伏せ攻撃によって幕を閉

じた。大人の上官たちが巧妙に身を隠すなか、子ども兵士の仲間は砲弾によって「ミンチ状の肉」（N'Dah 2008 :68）となったのだった。かろうじて生き残ったザンゴは、政府軍に保護され、終戦を迎えたのである。

子ども兵士についての研究書『子ども兵の戦争』（2006）でＰ.W. シンガーは、「子どもを兵士にすると、長期的には、子どもたちの心理的・倫理的発達が阻害される」（シンガー 2006 :164）としている。『子ども兵士の帰郷』に描かれるのも、薬物あるいはアルコールの影響下で戦闘を繰り返し、成長途上の価値判断能力を歪められ、心的外傷に苛まれる子ども兵士の体験なのである。

ザンゴは最後にゼプレに、「ぼくらの国の戦争の悲惨さがわかるには、あの苦しそうな声をあげている男たち、女たちのこと、やつれきった顔の人たち、レイプされ、腹を裂かれた女性たち、家族を抱えているのに喉を掻き切られた父親たちを見ないとだめなんだ」（N'Dah 2008 :69）と語る。これは自身の残虐行為の記憶に苛まれ、それなのに誰にも理解してもらえないザンゴの悲痛な叫びととることができるだろう。

ザンゴの実際の体験は、ガストンたちの批判がいかに的外れであるかを明らかにする。しかしザンゴの苦痛を知ることができるのは、彼の体験に予断なく耳を傾けたゼプレのような村人だけである。ザンゴを悪人とする村人たちは、ザンゴを対話すべき相手とはみなさず、ザンゴを理解しようともしないのである。

ガストンの非難に対し、その場にいたアヤブレは、現在の村の状況に責任があるのは村人全員だと反論する。彼女は、誘拐されたまま生死不明のザンゴ以外の少年たちの名前をあげ、「もしみんなで力を集めて、反乱軍を村から追い出していたら、たとえそれで全員が死んでいたとしても、ザンゴとほかのたくさんの子どもたちは、いまのようにはなっていなかったはず！」（N'Dah 2008:53）と、子どもたちが誘拐されるに任せた村人自身の無抵抗を批判したのである。

じつは作中ではそのご、ザンゴたちが誘拐された夜には村の指導層の男性たちが全員逃げだしていたことが明かされる。伝統裁判の場で弁明を試みたザンゴが、「あなたたちがこぞって責任者を自負するこの村が襲われたとき、ぼくは連れ去られたのです。ところがあなたたちはあの夜、全員逃げだしていたではないですか」（N'Dah 2008:79）と語るからである。

若者世代の対立は、対話や事実の解明によって解消可能なものにみえる。しかしガストンはこの時点では、アヤブレの説得を「きれいごと」（N'Dah 2008 :54）としかとらえられない。若者間の対立は、元子ども兵士の体験を想像し、対話を始めることの困難を浮かび

あがらせる。また村が子どもや女性を暴力から守れなかったのはなぜかという問いも投げかけるのである。

５.３　司法と村の伝統の対立

物語の最後には、村長の裁判の場での司法と村の伝統の対立が描かれる。この対立は、すでに村長逮捕の場面に読み取れる。村にやってきた憲兵たちは淡々と、「事件のいきさつを確認し、数人の目撃者から話を聞くと、被疑者を連行」（N’Dah 2008:84）した。後日アヤブレとザンゴの「供述聴取」も行われると、「憲兵が作成した犯罪調書は、予審判事へと送付」（N’Dah 2008:84）され、村長は起訴されたのである。司法の仕組みは整然と機能し、個人の感情や事情が介入する余地はみえない。しかし村人は、「（…）なんという冒涜！」（N’Dah 2008:84）と不信感を露わにするのである。

後日スカサ村の住民全員が傍聴した裁判での、検事の立場は明確である。近代国家の法に従えば、個人的な報復を試みた村長は有罪なのである。これを聞いて逆上したのが、上述のように、娘がザンゴからレイプされたケフォであった。村人たちにとっては、いかに「反乱軍の蛮行の犠牲者」であり、「未成年」だろうと、ザンゴこそが犯罪者なのであり、村長は伝統に従い、「正義を下しただけ」（N’Dah 2008:87）なのであった。しかし検事は、ザンゴと村の関係はこの裁判のもう一つの争点だと語る。そして村長は、「この少年の社会統合という重い責任を最初に引き受けるべき」（N’Dah 2008:92）立場にあるため、執行猶予付きの禁固 6 か月の刑を求めるとしたのである。

もし裁判が村長に有罪判決を下すだけの場であるなら、村人には司法及び国家への不信感が残り、ザンゴへの憎しみはいっそう募るだけではないだろうか。しかし作品では、裁判はそのようには描かれない。検事は、この二つ目の争点について噛み砕くようにして説明する。こうして法廷を、国際社会や国家が子ども兵士にどう対処しているかを知らせ、ザンゴが村で再び生活する可能性について提案する場としたのである。また検事はその際、村人が受けるであろう衝撃に配慮し、「あなたたちの苦しみを否定しようというのではありません」（N’Dah 2008:91）、「親であるあなたたち、苦しいでしょうが、しっかりと立ち直らねばなりません」（N’Dah 2008:92）と、村人の被害を認め、支える言葉を何度も挿しはさんだのである。

このようにして検事がまず説明したのは、国際条約に従えば、「大人によって戦争に加担させられた子ども」（N’Dah 2008:90）には、その行為の責任は問えないという点である。検事は、ザンゴのような子どもは、「戦闘行為への加担を子どもに強制したり、許可したりし

た大人たち」（N’Dah 2008:91）の代償を払わされているとしたのである。

次に説明したのは、元子ども兵士が抱える、心身の癒えがたい傷、社会に受け入れられない苦痛である。検事は、それでも村人に認められようと尽くすザンゴは、「あなたがたに謝罪しようと」している、「彼は変わったのです」、「この奇跡の息子が、あなたたちの苦しみをすべて忘れさせてくれないともかぎりません」（N’Dah 2008:92）と呼びかける。検事の語りかけはこのように、村長やガストンらが有する、犯罪者、偽善者、対話できない相手というザンゴ像に対し、後悔し、将来の可能性を秘めるザンゴ像を示して、村とザンゴとの和解の可能性を示すものとなっているのである。

検事が最後に語るのは、国の司法が進めている仕事である。検事は、「政府は、あなたたちとともにあります。ほんとうに有罪な者たちを暴き出し、可能な限り厳しく処罰するため、捜査は進行中です」（N’Dah 2008:92）としたのである。村人にとっては、ザンゴの帰郷はスカサ村固有の問題であった。しかし司法が国全体で果たしている役割に関する検事の言葉は、国内には同じように内戦の傷に苦しむ村があり、それぞれに村社会の再生を模索していると、村人に気づかせるものである。検事はこうして、村の住民間の報復の連鎖を押しとどめ、村人が各自の体験を相対化できるよう働きかけたのである。

とはいえ被告の村長は、裁判そのものを否定するかのように弁護士を斥け、みずから弁護する。そのような村長が最初に口にしたのは、「ここにいる少年は、生きるに値しないのです。やつは死の報いを受けるべきなのです！」（N’Dah 2008:94）というものであった。村長は続いて、村が受けたあらゆる被害とその残虐性を滔々と訴えると、「この途方もない不正をただすため、村人を保護する義務をわたしに課す伝統の名において、責任を果たさねばならなかったのです」（N’Dah 2008 :95）と、ザンゴ銃撃を正当化したのである。

裁判長はそれでも村長に有罪判決を下す。刑には執行猶予が付き、村はザンゴを受け入れるべきという司法の判断がそこに示されていた。しかし、「われらが村長はまさに犠牲者だ、裁判所が村長に正義の審判を下すよう、みなでここにやってきた」（N’Dah 2008:87）との考えで傍聴した村人にとり、受けた傷に対する正義はいまだなされていないのであった。ザンゴは、「これから始まる戦いは、すでに終わった別の戦闘、意に反して参加した戦闘より困難となりそうだ」（N‘Dah 2008 :97）と、村人との和解の困難の深さを思うのである。だがじつは村人の意識にもかすかな変化が生じていることを、物語は読者に明かす。裁判を経て村人は、「村の結束を固めるため、村全体が挑まねばならない重大な試練がいくつもあるということ」（N’Dah 2008 :97）に気づかされていたのである。

裁判の場面は、司法と伝統の厳しい対立を浮かびあがらせる。村人たちは裁判後、ザンゴを排除しても戦争の混乱と傷から立ち直れるわけではないと理解しだしてはいる。しかし村長らのザンゴへの憎しみは深い。村はこれからどのように再生すればよいのだろうか。本稿の最後に、村の女性たちの言動を参照し、そこに示唆される新たな形の村の結束や和解のあり方をみてみたい。

５.４　聞きとどけられない、女性たちの声

うえに見てきた対立では、意見表明はおもに男性によってなされている。唯一女性とし発言したアヤブレの意見は、相手のガストンに聞き流されてしまうのである。スカサ村では女性の意見はことごとく斥けられ、なかでも蔑ろにされているのはレイプの被害を受けた女性たちである。たとえばザンゴの母メヂダは、ザンゴが誘拐された際に反乱軍兵士によってレイプされたと夫に訴えたが、夫でザンゴの父親のゴザンゴはこれを信用しない。そのうえ上述したように、帰郷したザンゴを庇うメヂダをゴザンゴは容赦なく殴りつけるのである。妻が受けた心身の傷を思いやろうとしないゴザンゴの振る舞いには、メヂダへの憎しみさえ感じられるのである。

コンゴ民主共和国で性暴力を受けた多数の女性を治療してきた婦人科医デニ・ムクウェゲは著書で、性暴力を受けた妻が離縁される例が多いことを指摘する。ムクウェゲは、「男性は、自分の基本的義務だと考えている保護という行為を果たせなかった落ち度を、レイプされた妻に見るのではないか、と私は内心考えている」（ムクウェゲ 2023:103）とする。というのも夫は妻の「苦しみの原因に疑問を持ったり、夫婦として乗り越える課題と捉えるのではなく、追い出そうとする」（ムクウェゲ 2023:103）からという。つまり妻がレイプ被害に遭ったことで、夫は社会や家庭での男性としての権威を傷つけられたと感じるが、その報復は犯人ではなく妻にしているというのである。

このように被害者に向けられる捻じれた報復は、『子ども兵士の帰郷』に登場する男性たちにもみられる。ゴザンゴは、家長としての面子をつぶされた恨みを反乱軍ではなく妻に向けるかのようである。またアジョ・ンゴの父ケフォは、レイプから産まれた子を遺棄するよう娘に命じている。子どもを見殺しにできないアジョ・ンゴは、ザンゴのもとに子どもを置き去りにするのだった。娘の意向を聞こうともしないケフォは、娘と子ども双方を処罰しようとするかのようである。

男性たちはまた、内戦についても同じことをしているといえるだろう。内戦を起こし、持続させた者たちを彼らが非難することはない。事実上、責めを負わされているのは直接

的な暴力を受けた女性や子どもなのである。ザンゴは伝統裁判の場に乗り込み、「首都に行って叫んで、戦争に資金を出した者たちをみんな告発してください。あなたたちのほんとうの敵は、そうした人間たちです。ぼくではないのです」（N'Dah 2008:79）と訴えており、彼の言葉はこうした状況を表しているととれるのである。

村の若者たちも年長者の捻じれた報復をなぞる言動をとっている。ザンゴを捕らえ、死刑を課そうとした若者たちを止めに入ったアジョ・ンゴを、彼らは嘲笑するのである。

このときアジョ・ンゴは、「正義をなす権利をなぜ横取りするの？（…）あんたたちのうち誰が、強姦された女の苦しみを味わったことがあるっていうの？」（N'Dah 2008:36）と激しく怒り、泣き崩れたのだった。彼女が被害者として望んだのはザンゴの命を奪うことではなく、生まれた赤んぼうの父親としての責任を果たすことであった。それが彼女にとっての「正義」だったのである。

若者たちはこれに対し、「この重罪人［ザンゴのこと］がおまえ以外の女たちをレイプしたから殺すんだ。（…）ほかの女たちは尊厳を取りもどす必要があって、それはおれたちの役割だ」（N'Dah 2008:36）と自己正当化するのだった。だが彼らは、駆けつけたアヤブレに、そんなことを求めた女性がどこにいるのかと詰問されると、答えられない。若者たちは、実際には被害女性たちの口を塞ぎながら、彼女たちの代理人を僭称しているのである。ザンゴの命が狙われたのは、村の男性側の報復欲求を満たすためであり、被害女性たちのためではない。女性たちが求める正義は蔑ろにされたままなのである。

このようなスカサ村は、年長男性が権力を独占する男性中心社会である。男性たちは元子ども兵士や性暴力被害者の声を抑圧し、彼らだけの決定で村の結束を取り戻そうとしている。そのようにして再生したスカサ村が、今後も子どもや女性を守ることがないのは明らかである。しかし物語では、村の男性たちはみずからが負った傷に閉じこもるばかりである。村は内戦の原因や、戦後の和解に背を向けたまま、ただ存続を模索するかのようである。

ところで子どもが武装集団の犠牲になり、村共同体に深い傷を残すという主題は、『子ども兵士の帰郷』より先に書かれた、カメルーン作家レオノーラ・ミアノの小説『夜の内側（*L'intérieur de la nuit*）』（2005 年）にも書かれている[8]。小説では、アフリカの架空の国ムボアスの隣国から武装集団が侵入し、小さな村エクを襲うと、9 人の少年を連れ去る。だがそのまえに武装集団は、男児エイヤを生贄として切り刻み、肉を料理して食す儀式を村人

[8] 同作については、元木（2017）に詳細な考察がある。

に強要したのだった。出稼ぎでほとんどの男性が不在の村で、女性たちは肉を食べ、この事実に口を閉ざす。

小説の主人公アヤネはフランス在住の若い女性で、エク村に帰省中この出来事に遭遇する。しかし彼女は、武装集団が村に侵入したとき偶然樹上にいて難を逃れた。樹上から一部始終を目撃したアヤネだが、話し声は聞こえず、エイヤの殺害は彼女が木からそっと降りたあいだに行われた。村人が口にしたのがエイヤの肉だったとアヤネが突き止めるのは、9 日後のことであった。アヤネは、エクの女性たちはなぜ命がけで抵抗して子どもを守ろうとしなかったのかと問い、ただ黙ってエイヤの肉を食した彼女たちを嫌悪さえするのだった。

『夜の内側』は、この問いへの答えを得ようとするアヤネを描く。アヤネはエク出身の父をもち、エク村で育った。しかし両親の方針によりエク村の伝統実践を知ることなく成人し、せいぜい初等教育を受けただけの他の村人とは異なり、高等教育を受け、フランスで学位論文を準備中である。そのようなアヤネが村の女性たちの従順さを非難すると、母方のおばで、都市に暮らすウェンジザネは、みずからの命を長らえてクランを守ろうとしたエクの女性たちの世界観を理解するよう諭す。さらには、アヤネは独りよがりだ、村外の人間にエクの女性たちと同類とみなされるのを恥じているだけだ、そんなアヤネは、アフリカ人をケモノとみなすような「他者の視点からしか自分を見られない」(Miano 2005:201)タイプのアフリカ人や黒人と同じだと厳しく指摘するのだった。アヤネは、おばとのこうした議論を経て、自分自身を知るため、アフリカ人について知るため、しばらくは学業を中断してムボアスに留まる必要があると考えるようになるのである。

『夜の内側』は、アヤネの問いに明快な答えを出してはいない。しかしウェンジザネは姪に対し、「起きたことをくどくど言うのではなく、それを理解すること、回避するために原因を知ることが大事」(Miano 2005:203)とも繰り返している。アヤネはこれに従い、彼女が生きてきた社会を理解し、子どもの犠牲を繰り返さないための方法を探る作業に着手したととることができるのである。

ミアノの小説をこのように読むなら、『子ども兵士の帰郷』は、アヤネと同様の問いを提示する物語といえるだろう。うえにみたようにアヤブレは、「もしみんなで力を集めて、反乱軍を村から追い出していたら、たとえそれで全員が死んでいたとしても、ザンゴとほかのたくさんの子どもたちは、いまのようにはなっていなかったはず！」(N'Dah 2008:53)と、村人には抵抗という選択肢があったと指摘しているからである。アヤブレは、それなのに抵抗しなかったのはなぜ、と問うているのである。

ウェンジザネがいうように、スカサ村で起きたことを「理解」してみようとするなら、反乱軍が村を襲った日、村長たちは、生き延びて祖先の土地を守らなければという厳しい判断に基づいて逃げだしたと考えることもできる。彼らは伝統に厳格に従う人々である。ヨーロッパ人が発明し、アフリカにもたらした司法制度を認めようとせず、彼らの世界観のなかでザンゴを判断し、ザンゴを赦すことはないのである。

だがこの判断には、優先されるべきだったのは、いま生きている子どもへの責任よりも、祖先との繋がりであったのかという疑問も生じる。これでは紛争があるたびに女性や子どもは犠牲になることになる。この繰り返しを止めるにはどうしたらよいのか。本稿でみた村内の議論を振り返るなら、５.１でみた、元子ども兵士を赦すことで国全体の和解を進めるべきという、村長の相談役ジョマンの広い視野が村にはどうしても必要であると考えられる。村をこれまで結束させ、住民の生活を安定させてきた論理を捨てることなく、視野を広げ、これまで見ようとしてこなかったことに目を向けることが必要なのである。

本作でこのことを行動で示すのはメヂダである。彼女は強い決意をもって、アジョ・ンゴが置き去りにした赤んぼうを育てると宣言するのである。アジョ・ンゴの父ケフォにとってこの子は、娘を穢されるという、家長として受けた恥辱の象徴である。抹殺して当然なのであった。アジョ・ンゴは被害にもかかわらず、赤んぼうが生きることを望み、ザンゴの処刑に反対したのだが、ケフォは娘の内面や、赤んぼうが生きているという事実を考慮することはない。あたかもそのようなものは存在しないかのようである。

これに対して、「この子を死なせることはできない」（N’Dah 2008:46）と行動したのがメヂダであった。ゴザンゴは離婚をもちだしてメヂダを脅すが、彼女は断固として決意を変えなかったのである。アフリカで夫に離縁された女性が生き抜くことの困難を考えれば、メヂダの悲壮な決意がうかがわれるのである。メヂダが女性であり、レイプの被害者であることも重要である。本作は蔑ろにされてきた人物を通して、村長ら村の男性たちの狭い視野を炙り出し、幼い者、弱い者の犠牲に終止符を打つような再生を提示していると解釈できるのである。ここには、ザンゴへの赦し、彼と村人との和解は、この再生の道の果てにあるだろうという展望も読者に提示されているのである。

６．おわりに

『子ども兵士の帰郷』を以上に考察してきた。本作は、子ども兵士を描いたフランス語のアフリカ文学作品（ジュニア小説・小説）では扱われたことがない、元子ども兵士の社会復帰という重い問題を主題とする。作者ンダは自国での政治危機と子どもの徴兵をまえ

に、ジュニア小説としてこれを書いた。教師として身近に接してきた世代が紛争に巻き込まれたことへの怒りの深さは、彼のブログの文章からも読み取れる。

本作は、大人世代間と若者世代間の意見対立、国家の司法と村の伝統の対立を描き、元子ども兵士に対する多様な見方を読者に示す。同時に本作では、主人公を通して子ども兵士の体験が生々しく語られるのである。本作がコートジヴォワールの前期中等教育の教科書になっているのも、読者がさまざまな意見に触れ、議論して紛争後の赦しや和解について考えられる内容だからであろう。

本稿でみたように、物語では、元子ども兵士ザンゴと、彼が襲撃した故郷スカサ村の住民との溝は深い。ザンゴに向けられる村長や若者たちの激しい感情がいつか和らぐであろうという展望も書かれない。わずかにあるのは、内戦の記憶がない小学生ゼプレらの世代がザンゴとの関係を深めるだろうという希望である。紛争後の社会の現実とはこれほどに厳しいものなのだろう。

それでも物語は、レイプの被害者メヂダが、やはりレイプされた別の被害者の子どもを救うという行動をとおして、村はどのように再生するのかと問いかけてくる。危機のときには子どもたちを守らず、もっとも大きな被害を受けた子どもや女性の声に耳を傾けないスカサ村社会は、脆弱な立場の者たちを暴力的に抑圧する社会である。村長が望むように、指導層の権威を内戦前のように回復するだけなら、それは少なくとも犠牲者たちからは望まれない再生であるだろう。そしてそれはもちろん、ザンゴと村人が和解する道でもないだろう。本稿ではメヂダの行動を、子どもの犠牲を許さない再生へと村を促そうとする、弱者からの意思表示と解釈しているのである。

参考文献

勝間靖．2011.「武力紛争の影響を受けた子どもの安全保障をめぐる国際的な取組み」『アジア太平洋討究』17, 119-128.

佐藤章．2015.『ココア共和国の近代：コートジボワールの結社史と統合的革命』アジア経済研究所.

シンガー，Ｐ．W．2006.『子ども兵の戦争』小林由香利訳，日本放送出版協会.

武内進一．2017.「政治：長期の視点でアフリカを理解する」関谷雄一・遠藤貢（編）『社会人のための現代アフリカ講義』53-78．東京大学出版会.

戸田真紀子．2008.『アフリカと政治　わたしたちがアフリカを学ぶ理由　紛争と貧困とジェンダー』お茶の水書房.

ムクウェゲ，デニ．2023.『勇気ある女性たち：性暴力サバイバーの回復する力』中村みずき訳・米川正子監修，大月書店.

村田はるせ．2017.「エマニュエル・ドンガラの小説『狂犬ジョニー』における子ども像とドンガラの模索」『スワヒリ＆アフリカ研究』28，1-20.

元木淳子．2004.「アフリカの内戦をどう語るか―アマドゥ・クルマの『アラーの神にもいわれはない』の場合―」『小金井論集』創刊号，71-84.

元木淳子．2017.「アフリカの武力紛争と村の変容―レオノーラ・ミアノの『夜の内側』を読む―」『小金井論集』13，47-81.

Amnesty International. 2002. “Côte d’Ivoire, Sans une mobilisation internationale immédiate, le pays va sombrer dans le chaos,” 19 décembre 2002. Index AI : AFR 31/010/2002.

Attikpoé, Kodjo. 2008. “L’empreinte de la violence dans la roman de jeunesse en Afrique francophone,” Kodjo Attikpoé (sous la direction de), *L’inscription du social dans le roman contemporain pour la jeunesse*, pp. 181-202, Paris, L’Harmattan.

Boutsindi, Patrick-Serge. 2001. *L’enfant soldat*, Paris, L’Harmattan.

Couao-Zotti, Florent. 2001. *Charly en guerre*, Paris, Dapper.

Dongala, Emmanuel. 2002. *Johnny chien méchant*. Paris, Le Serpent à plumes.

Etty, Macaire. 2012. “Rencontre avec François d’Assise N’Dah,” *Le sanctuaire Etty Macaire*. https://ivoirecritique.blog4ever.com/rencontre-avec-francois-dassise-ndah（2024 年 9 月 13 日確認）

Kourouma, Ahmadou.2000. *Allah n’est pas obligé*. Paris, Seuil.（アマドゥ・クルマ．2003.『アラーの神にもいわれはない』真島一郎訳，人文書院.）

Miano, Léonora. 2005. *L’intérieur de la nuit*, Paris, Plon.

Minga, Katunga Joseph. 2012. *Child Soldiers as Reflected in the African Francophone War Literature of the 1990s and 2000s*.（A Dissertation submitted to the Faculty of Humanities, University of the Witwatersrand in fulfilment of the requirements for the Degree of Doctor of Philosophy, 2012）

Nadale, Acèle. 2023. “La Collection Adoras: Une Success Story Africaine,” *Afrolivresque*, 16 décembre 2023. https://www.afrolivresque.com/la-collection-adoras-une-success-story-africaine/ （2024 年 8 月 5 日確認）

N’Dah, François d’Assise. 2008. *Le retour de l’enfant soldat*, Abidjan, Valesse.

N’Dah, François d’Assise. 2008.［ブログの記事］“Retour de l’enfant soldat,” Les confidances de François d’Assise NDA. http://ndahfranc.centerblog.net/5870259-LE-RETOUR-DE-L-ENFANT-SOLDAT#c27999862（2024 年 8 月 7 日確認）

Quiñones, Viviana. 2012. “Guerre et littérature africaine de jeunesse.”（2012 年 10 月 18-19 日開催の国際シンポジウム Colloque international, Enfants en temps de guerre et littératures de jeunesse (20-21e siècles)発表原稿）https://shs.hal.science/halshs-00797895（2024 年 8 月 9 日確認）

UN, Conseil de Sécurité. 2006. “Rapport du Secrétaire général sur les enfants et le conflit armé en Côte d’Ivoire,” 25 octobre 2006, S/2006/835.

UNICEF. 2007. “The Paris Principles: Principles and Gidelines on Children associated with Armed Forces or Armes Groups,” February 2007. https://www.unicef.org/mali/media/1561/file/ParisPrinciples.pdf（2024 年 8 月 8 日確認）